

湯沢城(秋田県湯沢市佐竹町字古館山)(湯沢中央公園)

湯沢城(ゆざわじょう)は、出羽国雄勝郡の南部(現在の秋田県湯沢市湯沢中央公園)の古館山にあった城である。

概要

小野寺氏の系譜や事跡については、史料裏付けがとれず不詳な点が多いが、鎌倉時代に雄勝郡へ入部した小野寺経道が稲庭城を本拠とし、南部の抑えとして三男の小野寺道定により1227年(安貞元年)湯沢城を築いたとされている。

詳細は「小野寺氏」を参照

奥州仕置による一揆鎮圧後、最上義光が代官となり領有権を主張して小野寺氏と対峙した。1595年(文禄4年)に湯沢城が落城し最上氏の家臣楯岡満茂の居城となる。

詳細は「最上義光#出羽統一戦」を参照

その後慶長出羽合戦などで戦略拠点となった。1602年(慶長7年)に出羽国へ転封された佐竹氏が最上氏と領土を交換したことで佐竹南家領となり、初代佐竹義種が湯沢城の城郭や城下町の整備を行ったが、1620年(元和6年)の一国一城令により廃城となった。

力水

城跡の山麓から湧き出ている湧水で、佐竹南家のご用水として使用されていた。「からだに力がつく水だ」と城主や藩主が愛用したことからいつしか「力水」と名付けられ、石碑が建てられている。1985年(昭和60年)名水百選に選定され、また1990年(平成2年)には国土交通省の「手づくり郷土賞」に選ばれた。

Wikipediaによる

湯沢城は、中心市街地の東方「古館山(ふるだてやま)」と呼ばれる標高約200mの丘陵地帯に築かれた中世の山城であり、東西約400m、南北約600mの規模をもつ。城の西端に位置する見張台からは、正面に鳥海山(ちょうかいさん)、眼下には湯沢の西部はもとより横手盆地が一望できる。

湯沢城は、鎌倉時代後期、小野寺(おのでら)氏によって稲庭城の支城として築かれ、植道(たねみち)(1487?~1546)の代には一時小野寺氏の本拠となる。植道の子輝道(てるみち)(1534~97)の代に横手城(朝倉城)に本拠を移したのちも湯沢城は雄勝の中核として機能した。

しかし、文禄(ぶんろく)四年(1595)、最上勢の攻撃を受け落城し、文禄五年(1596)から最上の武将楯岡満茂(たておかみつしげ)が城主となる。関ヶ原の戦いから2年後の慶長(けいちょう)七年(1602)、佐竹義宣(さたけよしのぶ)の秋田転封にともない、佐竹南家(みなみけ)三代義種(よしたね)が城代として入り城を整備した。

元和(げんな)六年(1620)、一国一城令(いっこくいちじょうれい)によって湯沢城は破却されたが、本丸、二の丸、五社壇(ごしゃだん)、馬場、見張台などの跡が今もその地形を残している。

「湯沢市」サイトによる

■ 沿革

鎌倉時代初期、小野寺経道は雄勝郡に入部して稲庭城を居城にし、建治3年(1277)に三男である小野寺三郎道定に湯沢城を築かせ、雄勝郡支配の南の抑えとした。

－小野寺氏の盛衰－

天文 21 年（1552）、湯沢城において横手佐渡守（大和田光盛）と金沢八幡別当・金乗坊が謀って小野寺氏 12 代植道を暗殺し、小野寺氏の実権を奪うという事件が起きた。そのため植道の子である輝道は羽黒山に逃れ、庄内の大宝寺氏に保護された。その後、大宝寺氏の力を借りて成長した輝道は勢力を盛り返し、3 年後の弘治元年（1555）には佐渡守らを討ち、仇を取ったと言われる。

輝道の子である義道の時代になった天正 18 年（1590）、豊臣秀吉の奥羽仕置による検地に対し、小野寺領である仙北郡で一揆が起こった。この一揆は秀吉の命で大森城に在城していた上杉景勝によって間もなく鎮圧されたが、この責により小野寺領であった増田・湯沢の地は蔵入地として没収、替わって最上義光が代官に任じられた。

－最上氏の雄勝郡侵攻－

そのため文禄 2 年（1593）、最上氏は領有を主張して雄勝郡に侵攻した。

先陣は鮭延典膳秀綱が務めた。有屋峠を越えた秀綱はまず八口内城を攻撃し、これを落城させて城主・八口内尾張守貞冬を討った。その後、町田長右衛門が籠もる小野城、菅六郎内記が籠もる草井崎城、その他に中村城・寺沢城・院内城・横堀城・御返事城・合川城の諸城を次々と攻撃し、10 日間で落とした。そして湯沢城まであとわずかまで迫ったが、兵の疲弊もあり、結局この時は兵を引き上げた。

しかし文禄 4 年（1595）、再び最上氏は雄勝郡へ侵攻した。総大将は楯岡豊前守満茂、先陣は前回と同じ鮭延典膳秀綱。その他に小国氏・延沢氏・天童氏・東根氏といった山形の武将、さらに雄勝郡の山田氏・柳田氏・松岡氏・深堀氏といった小野寺氏の降将、由利郡からの援軍など数千の兵で湯沢城を取り囲んだ。この時の湯沢城の城将は、先だって小野寺義道に討たれた重臣・八柏大和守道為の弟である孫七郎・孫作兄弟であった。孫七郎らは小野寺氏の家名を許され湯沢城主となったが、雄勝郡の諸将が次々と最上勢に降り、本城である横手城からの援軍も無く、孤立状態であった。その結果必死の防戦も空しく、孫作は討死、孫七郎は自刃して果てた。

－最上氏の支配から佐竹南家へ－

その後、湯沢城は楯岡豊前守満茂が城主となり、最上氏の城として雄勝・平鹿郡の 100 余郷を支配した。さらに関ヶ原合戦後の慶長 7 年（1602）、この地は秋田に転封された佐竹氏に与えられ、湯沢城は佐竹南家 3 代義種が城主となった。義種は城を整備するとともに城下町としての町割を整え、城の麓に御屋敷をかまえた。しかし元和 6 年（1620）、「一国一城令」によって湯沢城は破却された。

■ 構成

湯沢城は本丸と、北側に位置する二ノ丸との大きく分けて二つの郭で構成される。

本丸は東西約 30m×南北約 80m の面積であり、周囲に五社壇・馬場・見張台などが設けられていた。

二ノ丸は東西約 40m×南北約 20m の面積であり、大手口は山麓の細小路から「七曲」と呼ばれるつづら折の登道を経て本丸と二ノ丸の間の堀切に通じている。

■ 現況

現在は中央公園より散策コースが設けられている。

「東北城館魂」による



